古代文字資料館発行『KOTONOHA』68 号（2008 年 7 月）

# 天聰汗錢の満文属格語尾について

吉池孝一

## 一

古代文字資料館には清の太宗ホンタイジが天聰年間（1627-1635）に発行した貨幣がある。この貨幣は、いわゆる無圏点満洲文字を用いて、左「sūre（聰明なる)」、上「han（王)」、下「ni（の)」、右「jiha（錢)」と書かれている。漢語で「天聰汗錢」と呼ばれるものである。

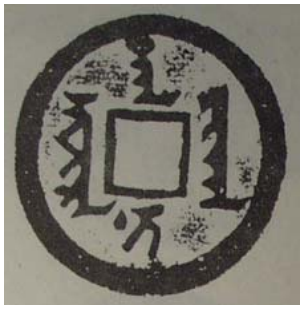
この天聰汗錢には『中国古錢譜』[1]の拓本によると少なくとも三つのタイプがある（下図参照)。

①は本館の貨幣と同様で、属格語尾がniとなっており、これはよく目にするタイプである。②と③はやや字形は異なるが、属格語尾は共にiとなっているようにみえる。あるいは②はnの点と右の線が繋がったもののようにもみえる。また③にはやや不鮮明な部分が有る。なによりも②と③がiであるとすると属格語尾に「語末形」ではなく「独立形」が使用されていることになる[2]。②と③にはなお解決しなければならない問題があるので、ここでは資料として信頼度の高い①のタイプによって論をすすめることにする。

---

[1] 『中国古錢譜』376-377 頁参照。

[2] 無圏点であろうと有圏点であろうと属格語尾のｉは満洲文字の「語末形」で表記されるのが普通であるが、②と③がｉであるとするとここでは「独立形」が使用されていることになる。もっともそれは貨幣の銘文として堂々たる風格を出すためともかんがえられる。中央の方孔を挟んで上「han（王)」と下「i（の)」が離れているため、「i（の)」が語末形で記されると弱い印象を与える。



①　　②　　③

さて、その属格語尾であるが、後代の有圏点満洲文字の正書法では、-ngの後でniとなり、nを含めそれ以外の文字の後ではiとなる。もっとも、満文老档や碑文などの無圏点満洲文字資料でも、管見によるかぎり、有圏点満洲文字の正書法と同様である。そうすると、①の属格語尾はniなのであるが、なぜiではないのかということになる。

二

愛新覚羅瀛生 2004 によると、満洲文語において属格語尾は-ng の後で ni となり、-n を含めそれ以外の文字の後では i と書かれるが、-n の後の i は実際には[ni]と読まれるという。もちろん-ng の後の ni は綴り通りに[ni]と読まれる[3]。論文では明示されないが、これは満洲文語の読み癖を述べたものであろう。愛新覚羅瀛生氏家伝の満洲口語でも同様である[4]。

また金光平・金啓孮 1980 によると満洲語の前身とみられる金代女真語にあっても[n]と[ŋ]の後では属格語尾は[ni]でありそれ以外は[i]であるという[5]。

明代華夷訳語の女真語資料においても同様の傾向がみられる。すなわち「皇帝の(属格)」にあたる女真文字に付された音訳漢字は「罕安你」(haganni)であり[-n]の後に属格語尾[ni]がくる[6]。

以上によるならば天聰汗錢が作られた時点において、子音の-n[n]と-ng [ŋ]

---

[3] 愛新覚羅瀛生 2004 の 63 頁参照。「以 n 結尾的名詞，其生格格助詞 i 寫 i，讀 ni，這是因爲受前面的 n 的影響，ni 拼讀而成。以 ng 結尾的名詞，其生格格助詞讀 ni 的道理，也與此相同，這是因爲受 n 的影響所致，但因其前面是 ng，所以 i 必須寫作 ni，不可寫作 i。」引用文の「生格格助詞」は本稿で言う属格語尾をさす。

[4] 愛新覚羅瀛生 2004 の 240-245 頁参照。たとえば buhū i, gūnin ni, sian šeng ni など。

[5] 金光平・金啓孮 1980 の 205 頁参照。

[6] Kiyose, G. 1973 の p. 112 による。

（語末で-ng 韻尾を持つものの大半は漢語からの借用語であるから、この-ngは実際には[ŋ]ではなく[n]と発音された可能性がある）の後で、属格語尾は[ni]と発音されていたとみて大過ないであろう。それを、通常目にする満文老档や碑文などの無圏点満洲文字資料および後代の有圏点満洲文字では、子音字-n の後で i と綴り、子音字-ng の後では ni と綴ったというわけである。

三

前述の「-n の後で i と綴り-ng の後で ni と綴る」という正書法が何に拠って確立したものかなお検討を要するが、天聰汗錢の満洲語銘文が作られた時点では、この正書法は未だ確固たるものではなく-n の後で i とするかそれとも ni とするか揺れていたのであろう。そのため、①のような銘文の貨幣ができたと考えておきたい[7]。もしそうであるならば、最初期の無圏点満洲文字の資料には、天聰汗錢の他にも、-n の後で ni と綴るものが有ってしかるべきであるが寡聞にして知らない。専家のお教えを願えれば幸いである。

〈参考文献〉

愛新覚羅瀛生 2004.『満語雑識』北京：学苑出版社。

金光平・金啓孮 1980.『女真語言文字研究』北京：文物出版社。

国家文物局『中国古錢譜』編撰組 1989.『中国古錢譜』北京：文物出版社。

Kiyose, G. 1973. *A study of the Jurchen Language and Script in the Hua-I-I-Yu.* Kyoto: Hōritsubunka-sha.

[7] もしも先に挙げた②と③が資料として有効であり、ともに属格語尾は i であるとしたならば、①が先にでき、後にそれを訂正する順で②と③ができたということであるかもしれない。なお検討を要する。